

令和8年度 関係団体等懇話会

【実施報告書】

目次

1	開催概要	1
	（1）実施の目的	1
	（2）実施方法	1
	（3）当日の流れ	1
	（4）参加者	2
2	懇話会の内容	3
	（1）第6次安城市障害者計画の進捗について	3
	（2）意見交換内容（要旨）	3
	（3）各グループの発表	11

令和8年 10 月
安 城 市

1 開催概要

(1)実施の目的

令和8年度中に次期障害者計画等を策定するにあたり、障害のある人やその家族・支援者等の意見を計画に活かすことを目的とする。

区分	内容	
開催日時	令和8年9月4日(金) 午前10時から正午まで	
開催場所	へきしんギャラクシープラザ3階 大会議室	
参加者	関係団体	15人(他にガイドヘルプ、要約筆記等支援者2人)
	事務局	安城市障害福祉課 7人
	実施支援	(株)ジャパンインターナショナル総合研究所 2人

(2)実施方法

令和7年度に取りまとめた関係団体等へのヒアリングシート調査結果を元にしたテーマを設定し、2グループに分かれて意見交換を行った。実施にあたっては、小グループにより、全員が意見を述べ、より多くの意見を集約することができるようにした。

テーマ① インクルーシブな保育・教育に関すること

テーマ② 多様な雇用・就労機会に関すること

(3)当日の流れ

- 10:00～10:05 開会あいさつ
- 10:05～10:15 第6次安城市障害者計画の進捗について
- 10:15～10:20 グループワークの進め方について
- 10:20～10:55 テーマ①についてのグループ検討(35分間)※自己紹介込み
- 10:55～11:00 休憩
- 11:00～11:30 テーマ②についてのグループ検討(30分間)
- 11:30～11:40 グループごとの検討結果発表(各グループ5分)
- 11:40～11:45 閉会あいさつ

(4)参加者

団体名	参加者名	グループ
安城市身体障害者福祉協会	都築 文明	A
難聴・中途失聴者の会 ともだち	富田 真理	A
安城市手をつなぐ育成会	原 恵美子	B
安城市心身障がい児を持つ親の会 ひまわり会	有津 まり子	A
安城地域精神障がい者家族会「ぶなの木会」	藪内 敏彦	B
社会福祉法人ぬくもり福祉会	鈴木 博	B
社会福祉法人ポテト福祉会	黒川 久美子	A
社会福祉法人聖清会	片山 健吾	B
社会福祉法人観寿々会	牧原 信介	A
社会福祉法人サポートバディ	加藤 領助	B
社会福祉法人ぶなの木福祉会	青木 恒二	A
要約筆記サークルなしばた(安城市ボランティア連絡協議会)	神谷 秀夫	A
視覚部ボランティア心のひとみ(安城市ボランティア連絡協議会)	吉沢 弘子	B
特定非営利活動法人5-CHA(安城市ボランティア連絡協議会)	須場 康貴	B
軽度知的障害を考える会スマイル(安城市ボランティア連絡協議会)	川崎 僚	A

※他、ガイドヘルプ1名、要約筆記者1名

2 懇話会の内容

(1)第6次安城市障害者計画の進捗について

策定中の「第6次安城市障害者計画」について、計画期間、関連計画などの基本的事項、統計データの特徴、基本理念、基本目標等の計画の考え方について説明を行った。

(2)意見交換内容(要旨)

ア Aグループ 意見交換

テーマ① インクルーシブな保育・教育に関すること

- 近所同士の付き合いや子ども会などが減少し、共に外で遊ぶ活動が減っているため、地域での触れ合いやつながりを大切にしたい。
- 共働き世帯やひとり親世帯の増加で、防災訓練やイベントに親が参加する余裕がなく、情報を得ることが困難である。
- 日常的な交流は障害者や高齢者同士にとどまってしまっており、かかわりが限定的である。
- 保育園では遊びながら交流できるようにしてきており、小さな頃からの福祉教育が重要と考える。
- 共に学べるようにするには保護者への相談体制や社会全体の気運づくり、共に過ごす時間を持つことが必要である。
- 共に学ぶ教育は大切だが先生だけでは大変であり、スクールソーシャルワーカー等の専門家も不足し、学校と行政の縦割りで支援が分断されがちである。
- 幼少期から家庭内で愛情に満たされて育った子は、グループホーム入所時にも自立に適応しやすいため、家族で過ごす豊かな時間も重要である。
- 共働きで、子どもの遊び方がゲームのみになっている場合があり、現代の子どもたちがどのように育っていくのか心配している。
- 配慮を要する児童が増え、保護者の過度な要求もあり教育現場が疲弊している。家庭と学校や支援機関と信頼関係を築くことから始めるべきである。
- 障害のある人となない人が、教育や活動で分断されてしまっているため、共に交流できる機会を多く実施していくことが有効ではないか。

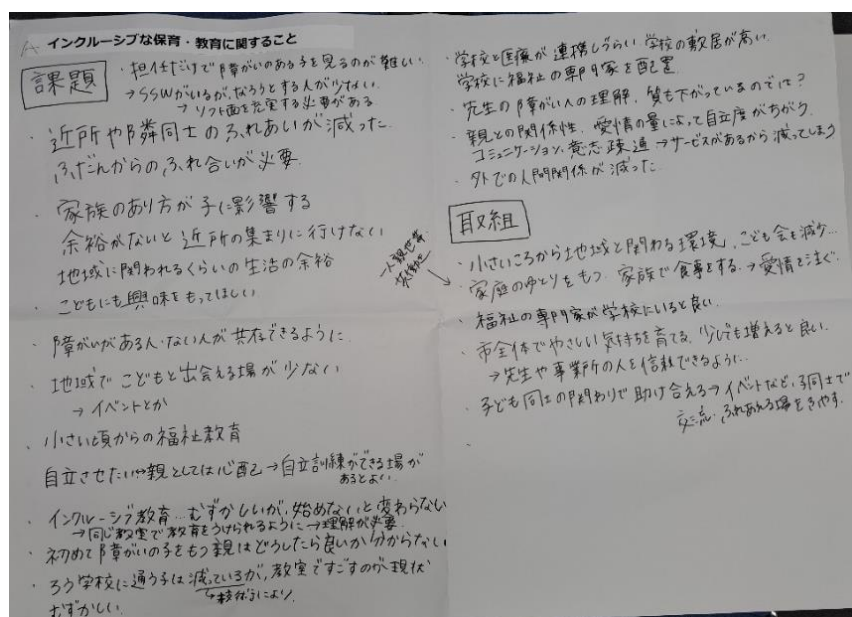
テーマ② 多様な雇用・就労機会に関すること

- 同僚の声かけや孤立させないサポートが職場定着を左右する。サポートの丸投げはいじめやうつ病等の二次障害を引き起こす原因になる。
- 高校卒業後は送迎や長時間の預かりがなくなり、親がフルタイム勤務や正社員を断念せざるを得ない。成人期移行後の支援について、独自の制度化が望まれる。
- 企業側の相談窓口設置や専門支援員の配置が必要であり、福祉的な視点での受け入れ環境の整備が必要である。
- 就労継続支援A型のサービス事業所が減っており、人材も定着しないため、就労指導員も名前を覚える前に退職してしまうような事例もある。
- 就労系のサービス事業所が増えているが、支援スキルが不足してる場合もあり、適切な評価・監査・指導する仕組みが必要である。
- 「この作業なら健常者以上にできる」などのアピール力を育てる本質的な支援が求められる。
- 企業側が聴覚障害に対する正しい知識や理解などの障害特性への理解を深められるよう指導・要望してほしい。



意見まとめ

テーマ① インクルーシブな保育・教育に関すること	
【課題】	
・担任だけで障害のある子を見るのは難しい。SSW(スクールソーシャルワーカー)がいるが、なろうとする人が少ない。ソフト面を充実する必要がある。	
・近所や同世代同士のふれあいが減った。普段からのふれあいが必要。	
・余裕がないと近所の集まりに行けない。地域に関われるくらいの生活の余裕。	
・子どもにも興味をもってほしい。	・障害がある人・ない人が共存できるように。
・イベントなど地域で子どもと出会う場が少ない。	・家族のあり方が子に影響する。
・小さい頃からの福祉教育。	・外での人間関係が減った。
・自立させたい⇨親としては心配。自立訓練ができる場があるとよい。	
・インクルーシブ教育は難しいが始めないと変わらない。同じ教室で教育を受けられるように理解が必要。	
・初めて障害の子をもつ親はどうしたら良いか分からない。	
・ろう学校に通う子は減っているが、教室で過ごすのが現状むずかしい。	
・学校と医療が連携しづらい、学校の敷居が高い。→ 学校に福祉の専門家を配置。	
・先生の障害への理解、質も下がっているのでは？	
・親との関係性。愛情の量によって自立度がちがう。コミュニケーション、意志疎通。サービスがあるから減ってしまう。	
【取組】	
・小さいころから地域と関われる環境、こども会減少…	
・家庭のゆとりをもつ。家族で食事をする→愛情を注ぐ。	
・福祉の専門家が学校にいと良い。	
・市全体でやさしい気持ちを育てる。少しでも増えると良い。先生や事業所の人と信頼できるように。	
・子ども同士の関わりで助け合える→イベントなど、子同士で交流、ふれあえる盲学校、分校のような場を増やす。	



テーマ② 多様な雇用・就労機会に関すること

【課題】

- ・障害のある人を雇用した際のまわりの対応、仕事でもまわりがサポートする意識
- ・18歳以降は、親が働き続けるのが難しい。サービスの時間(送迎)が短くなる。親の負担。
- ・障害のある人をサポートするパートさん→いじめに発展した事例→企業側の配慮(相談など)
- ・スーパーで働くダウン症の子。働きつづけられる良い事例。【雇用する側の姿勢】
- ・A型が減っている。B型ではできる人に仕事がいってしまい困っている
- ・企業の障害者雇用の扱いがまだ不十分。
- ・指導員が頻繁に入れ替わる。知識がない人も多い。→話をゆっくり聞くのも難しい。
- ・難聴は情報をキャッチするのが難しい。中等度だと手帳を取得できない。会議に参加するのも難しい。理解にむけた取組が必要。
- ・伝えても理解してもらうのが難しい。サポートが必要。
- ・民間の事業所の問題…売上・利益主義
- ・事業所でも専門の職員がいない場合がある。サービスの質、ふさわしくない事業所。

【取組】

- ・障害者側も自分をアピールできるように、個性。Win-Win な関係に(企業ー障害者)
- ・企業は門戸を広く。

多様な雇用・就労機会に関すること

課題

- ・障害のある人を雇用した際のまわりの対応、仕事でもまわりがサポートする意識
- ・18歳以降(子ども)は、親が働き続けるのが難しい。
サービスの時間(送迎)が短くなる → 親の負担(増)
- ・障害のある人をサポートするパートさん→いじめに発展した事例
→ 企業側の配慮(相談など) (雇用する側の姿勢)
- ・スーパーで働くダウン症の子が働きつづけられる良い事例
- ・A型が減っている。B型ではできる人に仕事がいってしまい困っている
- ・企業の障害者雇用の扱いがまだ不十分
- ・指導員が頻繁に入れ替わる。知識がない人も多い。
→ 話をゆっくり聞くのも難しい
- ・難聴→情報をキャッチするのが難しい。
→ 中等度だと手帳も取得できない。会議に参加するのも難しい。
→ 理解にむけた取組が必要
- ・伝えても理解してもらうのが難しい → サポートが必要
- ・民間の事業所の問題点…売上・利益主義

- ・事業所でも専門の職員がいない場合がある。
→ サービスの質、ふさわしくない事業所
- ・障害者側も自分をアピールできるように、個性。
→ Win-Win な関係に。企業ー障害者
- ・企業は門戸を広く。

イ Bグループ 意見交換【要旨】

テーマ① インクルーシブな保育・教育に関すること

- 児童発達支援から保育所への移行において、人材や予算の都合で進路が狭められている。また、学校での通常級と支援級や特別支援学校との交流は形骸化してしまっている。
- 支援が必要な子どもやその保護者が孤立してしまう事態がある。教師の負担も大きく、学生ボランティアなどを取り入れられるとよい。
- 障害当事者と接点を持ったことがない教員が多く、個人の熱意に依存しがちであるため、組織的に障害理解のカリキュラムを位置づけるべきである。
- 自身の体験として、盲学校に行ったときにほっとした。視覚障害の場合は特別な配慮が必要なので、一律に一緒ではなく柔軟に選択できる仕組みが必要である。
- 高校等での精神疾患教育は教科書上で数行のみにとどまる。当事者や支援者を招いた生の声を直接聴く体験学習にすべきである。
- インクルーシブを進める上で、摩擦が生じないように、受け入れるクラス側の心の準備も必要である。
- 小学校は下校が早く、学童保育での受け入れが難しいため、母親が離職せざるを得ない。放課後の居場所確保の支援が必要である。
- 現在、市(小学校)と県(特別支援学校)が縦割りで情報共有が途絶している。また、高校進学時の情報不足を解消するため、進路相談会や勉強会などがあるといい。
- 学校現場の人材不足に対し、地域住民や福祉事業者、学生ボランティアが入るなど、より多様な人材の参画により教育環境が充実するのではないか。

テーマ② 多様な雇用・就労機会に関すること

- 精神障害の雇用が他の障害に比べて低い。精神障害は見えにくい障害のため、理解されにくく、職場での支援が必要である。
- 就労継続支援B型の事業所で、一般就労やA型事業所へのステップアップへの意欲が出にくい場合がある。また、本人の意欲とやりたい仕事を結びつけるコーディネートが求められる。
- 視覚障害者で福祉事業所に行く人も増えているが、視覚障害者向けの受け入れ体制がなく、新たな課題も出ている。
- 送迎サービスに依存せず、早期に自分で通勤する力を獲得することや、必要な支援等を他者に説明するコミュニケーション力を身につけることが大切である。
- 仕事を続けるためには休憩時間の過ごし方や職場のルールを守れるかなどの方が影響が大きい。

職場でも福祉的な視点で見守ってほしい。

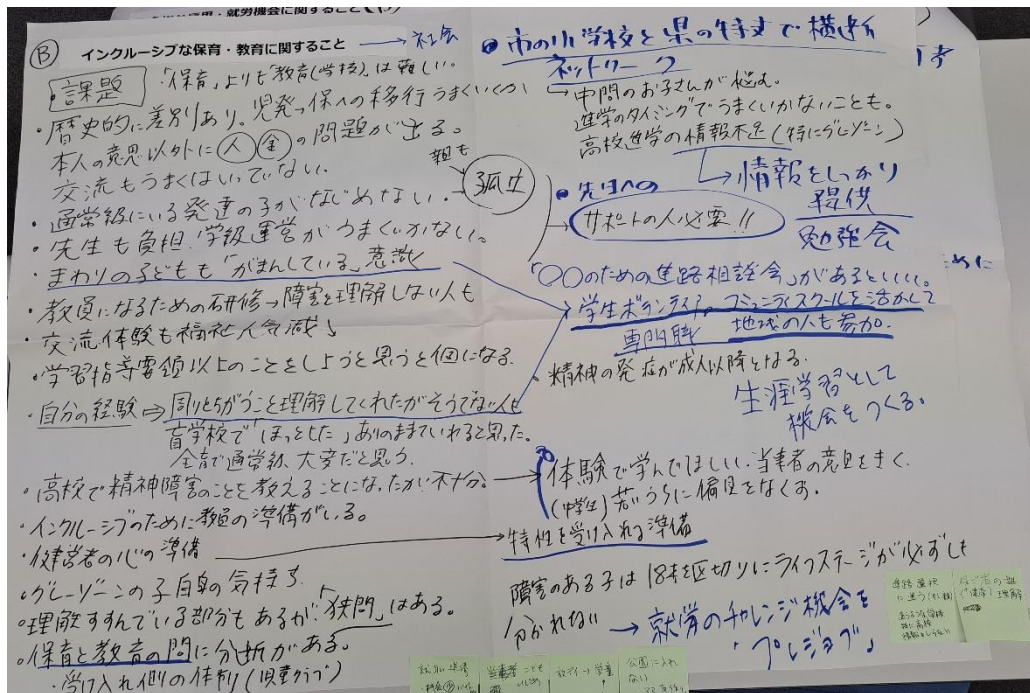
○業種で仕事を考えるのではなく、業務を切り出して障害者でも対応できる仕事の再構成が求められる。雇用率の達成のみではなく、いかに長く働けるかを考えるべきである。

○就労定着率の高い職場では、対話時間を設けて困りごとを聞く場を提供するなどをしており、こうした福祉的アプローチの企業への推奨が必要である。

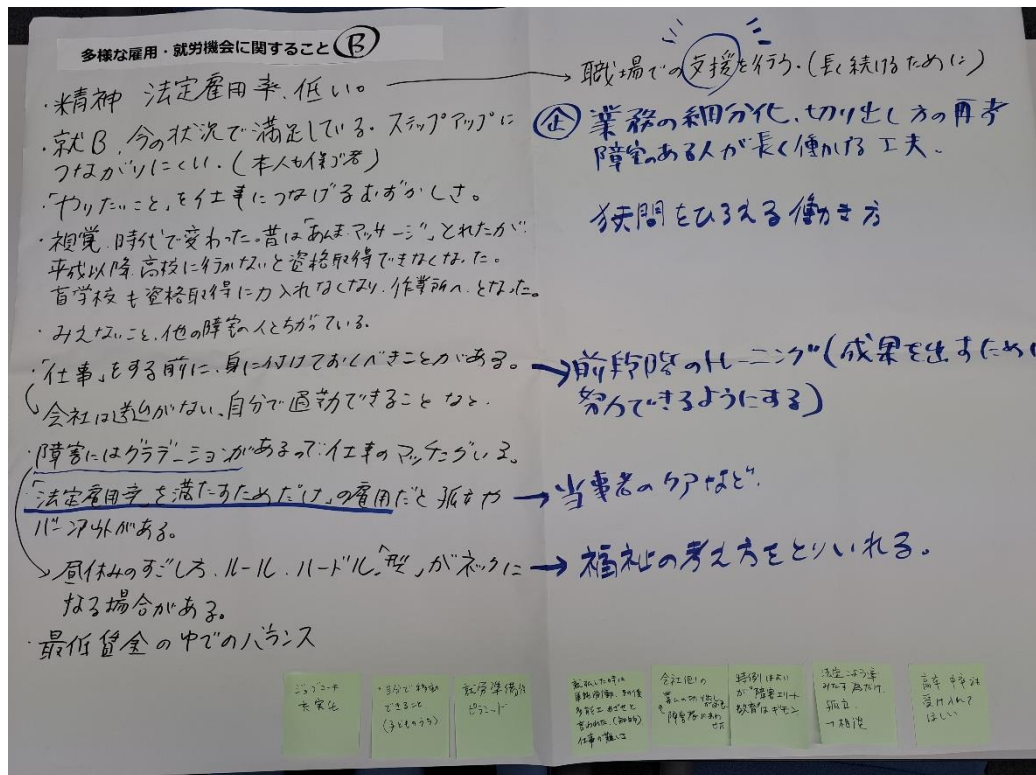


意見まとめ

テーマ① インクルーシブな保育・教育に関すること	
【課題】	【取組】
・「保育」より「教育(学校)」は難しい。	・市(小学校)と県(特別支援学校)で横断ネットワーク ・中間のお子さんが悩む。進学タイミングでうまくいかないことも。高校進学時の情報不足(特にグレーゾーン)があるので情報をしっかり提供する。勉強会。 ・「〇〇のための進路相談会」があるといい。 ・障害のある子は18歳区切りにライフステージが必ずしも分かれなない。就業のチャレンジ機会を。「プレ・ジョブ」など。
・歴史的に差別あり。児童発達支援から保育所への移行が上手くいくかは本人の意思以外に「人」「金」の問題が出てくる。	
・交流もうまくはいっていない。	
・通常級にいる発達障害の子がなじめない。親も孤立。	
・進路選択に迷う(本人も親も)特に高校。情報も知らない。	・先生へのサポートが必要。 ・学生ボランティアの活用。 ・コミュニティスクールを活かして地域の人も参加する。専門職も。
・先生も負担。学級運営がうまくいかない。	
・まわりの子どもも「がまんしている」意識が。	
・教員になるための研修はあるが障害を理解していない人が多い。交流体験も福祉の人气が減っている。	
・学習指導要領以外のことをしようと思うと個人の意識頼りになる。	・体験で学んでほしい。当事者の意見を聴く。 ・中学生など若いうちから偏見をなくす。 ・生涯学習の機会をつくる。 ・特性を受け入れる準備
・インクルーシブのために教員の準備がいる。	
・自分の経験→周りとは違うことを理解してくれた人もいたがそうではない人もいた。盲学校に行って「ほっとした」。ありのままでいられると思った。全盲で通常学級は大変だと思う。	
・高校で精神障害のことを教えることとなったが不十分。	
・健常者の心の準備	・特性を受け入れる準備
・理解が進んでいる部分もあるが「狭間」はある。	
・保育と教育の間に「分断」がある。受入側の体制(児童クラブなど)	
・就職準備の機会が少ない(バイト等)	
・学童に専門職がない。	
・こどものいじめ。	
・公園に入れない。ママ友づくり×。孤立。	
・健常の保護者の無理解	



テーマ② 多様な雇用・就労機会に関すること	
【課題】	【取組】
・精神障害の法定雇用率が低い。 ・就労 B で今の状況で満足している。ステップアップにつながりにくい。(本人も保護者も) ・「やりたいこと」を仕事につなげるむずかしさ。 ・障害にはグラデーションがあるためマッチングが必要。	・職場での「支援」を行う。(長く続けるために) ・企業における業務の細分化、切り出し方の再考。障害ある人が長く働ける工夫。 ・ジョブコーチの充実化 ・就労準備性ピラミッド ・会社側の障害者に合わせた業務の切り出しが必要。
・視覚、時代で変わった。昔はあんまマッサージなどそれなりに。平成以降高校に行かないと資格取得できなくなった。盲学校も資格取得に力を入れなくなり、作業所へと。みえないこと、他の障害の人とちがっている。	
・「仕事」をする前に、身につけておくべきことがある。会社は送迎がない。自分で通勤できることなどが必要。	・前段階のトレーニング(成果を出すために努力できるようにする) ・自分で移動できること(子どものうちから)
・「法定雇用率を満たすためだけ」の雇用だと孤立やハラスメントがある。	・当事者へのケアなど。相談
・昼休みの過ごし方やルール、ハードル、「型」がネックになる場合がある。	・福祉の考え方を取り入れる。
・最低賃金でのバランス	
・特例はよいが“障害エリート教育”は疑問	
・高卒、中卒でも受け入れてほしい	



(3)各グループの発表

グループごとに代表者が意見交換の内容について発表を行い、それぞれの結果を共有した。

